SPIRITS
特集 総力
広げよう 復興の輪!
FUKKO
LEARN FROM YESTERDAY,
LIVE FOR TODAY,
HOPE FOR TOMORROW!
指原莉乃
from HKT48
くまモン
撮影／篠山紀信

# 熊本地震を振り返って…

**指原**　熊本を中心に大きな被害があったと知ったときは、とてもショックでした。すぐにグループとして支援に行きたいとスタッフさんに提案したのですが、私たちが公式に訪問することで起きる混乱や、余震による更なる被害なども考慮して叶えられず、もどかしい時間を過ごすことになりました。

**くまモン**　ボクもしばらくは活動をお休みしたモン……。こどもの日の5月5日、被害の大きかった西原村の保育園訪問から活動を再開したモン。避難生活を送る園のお友だちやお年寄りの皆さんとふれ合うことが、ようやくできたモン。

**指原**　これは初めて話すことなのですが、地震から一か月経ってから、プライベートで益城町の幼稚園を訪問させていただいたんです。自分に何かできることはないかと、いてもたってもいられなくなって、行動を起こしました。

私が訪問することは直前にしか知らせなかったのに、園児のみんなが一生懸命歌の練習をしてくれていて。ありがちな言葉ですが、その歌で逆に元気をもらうことができたんです。

実際にこの目で被害状況を目の当たりにしたこともあり、とても心に残る訪問になりました。

**くまモン**　さっしーの気持ち、うれしいモン。ボクも、みんなからたくさんの元気をもらったモン！

## Rino Sashihara　Profile & Information

●1992年11月21日生まれ、大分県出身。血液型O型。愛称さっしー。HKT48チームH所属。●HKT48劇場支配人兼任。今夏、瀬戸内7県を拠点に発足するSTU48の劇場支配人も兼任する予定。★センターを務めるHKT48の9thシングル『バグっていいじゃん』が発売中。★「坤井と後藤と優しのSHELLYと芳しの指原が今夜くらべてみました」（日本テレビ系）、「あるある晩餐会」（テレビ朝日系）など、バラエティー番組への出演多数。

[HKT48公式サイト]http://www.hkt48.jp/

[指原莉乃Twitter]@345__chan

[指原莉乃Instagram]@345insta

## Kumamon　Profile & Information

●3月12日生まれ、熊本県出身。性別はオスじゃなくて男の子！ 得意技は、くまモン体操と、サプライズを見つけて広げること。●くまもとサプライズくまモン隊の隊長。熊本県知事から、熊本県の営業部長兼しあわせ部長に任命されている。

[くまモン公式サイト]https://kumamon-official.jp/

[くまモンTwitter]@55_kumamon

# 熊本でコンサートを！

**指原**　当初、8月4日に熊本県立劇場でHKT48がコンサートを行う予定があったのですが、震災による会場の破損で開催が延期に。楽しみにしていてくださった熊本の方に申し訳ないと思って、熊本城二の丸公園でのイベントを計画したんです。でも、そのイベントも、悪天候の影響で1時間で中止になってしまって……。熊本ではまだコンサートができていないことが本当に心残りなんです。

**くまモン**　そうだったんだモン。

**指原**　3年くらい前に、くまモンのツイッター宛に、「HKT48のコンサートにも来てください」って、直接リプライしたことがあって（笑）。そのときは実現しなかったけど、今度は、一緒にステージに立ちたいなー！

**くまモン**　うん☆　もっと、もっとみんなが熊本に遊びに来てくれるように、ボクもがんばるモン！　心をひとつに、エイエイモーン☆

**指原**　心をひとつに。それが一番。



## 指原莉乃 from HKT48 ×くまモン

# 復興の足がかりとして宮城の美味しい魚や景色を味わいに、ぜひ来て欲しい！

6年前のあの日。3・11の時、
私は「SUPER☆GiRLS」のメンバーではなく、
地元・仙台のアイドルグループに所属していました。
テレビをつけながら家にいて、
ちょうどひとりでダンスのレッスンをしていたんです。
忘れもしない午後2時46分に地震が起きました。
自分で立っていられない程、ものすごく揺れて
思わず家から外に飛び出したのを覚えています。
地震の揺れで、我が家の壁が斜めにヒビが入って、
怖くて家の中には戻れませんでした。
その後、家族と落ち合って、親戚の家に避難しました。
東日本大震災の復興関連のテレビニュースで、
津波の映像が流れるのを目にするんですけど、
震災当時は、ニュースをまともに
見ることができなかったんです。
「信じられない。本当にこれが現実なの……」
って思ってしまって…
今でも、揺れを感じると
びっくりするくらい心臓がドキドキします。
宮城には、本当に良いところが
たくさんあります。
あれから6年経って、
徐々にですが宮城県は復興して来ています。
美味しい海の幸を食べたり、
石巻には石ノ森萬画館、
景色のきれいな松島や、カキも美味しいので、
ぜひ多くの方に来て欲しいと思います。
皆さんに来て頂ければ、私もすごく嬉しいし、
宮城の皆さんも元気になるし、

特集
総力
広げよう
復興の輪!
SPIRITS FUKKO
渡邉幸愛
from SUPER☆GiRLS
@陸前高田・気仙沼
撮影／細居幸次郎
スタイリング／鈴木里菜
ヘア&メイク／田村直子
つながりを持って生きて行けると思います。
今回、撮影した一本松のある陸前高田も、
徐々に復興の兆しが感じられます。
東日本大震災の時、私自身は、
津波の被害は受けていなかったのですが、
当時の教訓から、津波は来ないって思っていても、
津波はいつ来るかわからないので、
命最優先で高台などの安全な場所に避難してから
家族や友達で、いろんなやりとりをして欲しいと思います。
過去から教訓を学び、未来に希望を持って、
今を生きて行けたらと思います。
Kome Watanabe
●1998年3月17日、宮城県生まれ。
●身長：160cm。アイドルグループ「SUPER☆GiRLS」のメンバー。
●愛称：コウメ。毎月第2第4月曜日11時30分～ラジオ石巻にて「はぴらぶラジオ」放送中。
【SUPER☆GiRLS公式サイト】
http://supergirls.jp/

総力特集
広げよう復興の輪
SPIRITS×FUKKO
上白石萌歌×くまモン
@熊本・南阿蘇
撮影／西田幸樹
熊本城は昨年の地震で甚大な被害を受けた。右手の石垣に復旧・復元工事の様子がうかがえる。熊本城では支援のための「復興城主」制度を設けている。詳しくは熊本城HPへ http://wakuwaku-kumamoto.com/castle/

1本のCMがある。
熊本地震の影響で未だに全線復旧していない
南阿蘇鉄道のホームで、
Charaの「やさしい気持ち」を歌う少女。
この「午後の紅茶」のCMに出演した
上白石萌歌さんが再び熊本へ。
くまモンと一緒に——

あの「午後の紅茶」のCMは、
去年の11月に南阿蘇鉄道の「見晴台駅」で
撮りました。
ここに帰って来られてうれしいです。
CMでは南阿蘇鉄道さんと
地元の人たちが全面協力してくださって
みんなで作り上げました。
南阿蘇は、熊本地震の被害が大きくて、
鉄道もまだ完全復旧していないんです。
私も鹿児島出身で、同じ九州なので
地震はほんとうにショックでした。
だけど熊本の人は明るくて強い。
絶対に復興してくれると信じています。
くまモンがその熊本人の象徴ですよね。
今回初めてくまモンに会って、
可愛い仕草に癒やされて、もうメロメロに。
ホームでの撮影中、スタッフさんが「くまモン、
ホームから落ちないでね」って言うと、
わざとよろけたりするお茶目さんなのに、
実はすごいジェントルマンで、
撮影が始まると、私が落ちないように
手をギュッと握ってくれるんですよ。
「マンガよせがきトレイン」にも感動しました。
あんなにたくさんの漫画家さんが、
復興への願いを込めて描いたなんて……。
漫画のキャラとくまモンが抱き合っている
よせ描きもあったりして、
あったかい気持ちになりました。
くまモンもよせ描きをじっと見ていました。

## 熊本の人 くまモンは明るくて強くて、そしてやさしい——復興を信じています。

完全復旧を目指す南阿蘇鉄道の高森駅のホームにて。

ん!?
二人の後ろにある
この列車は!?
次ページへGO!!

**Moka Kamishiraishi** Profile & Information

●2000年2月28日生まれ。鹿児島県出身。●身長151cm。●趣味／歌うこと、踊ること、詩を書くこと、サイクリング。●実姉は映画『君の名は。』のヒロイン役、上白石萌音。
★2011年 第7回「東宝シンデレラ」オーディショングランプリ受賞。
★キリン「午後の紅茶」のCMで、南阿蘇鉄道のホームで「やさしい気持ち」を歌い話題に。
★映画『ハルチカ』出演。
★ミュージカル『魔女の宅急便』にキキ役で主演。8月1日から東京・初台の新国立劇場中劇場、8月31日から大阪・梅田芸術劇場シアター・ドラマシティで上演。
[上白石萌歌公式サイト]
https://www.tohoent.co.jp/actress/profile.php?id=7304

漫画家・原作者の想いを乗せた列車が、
熊本・南阿蘇を走る
熊本地震から一年。「熊本の復興を応援したい!」と集まった小学館各誌で活躍する117名の漫画家・原作者による応援イラスト。そのイラストを乗せた南阿蘇鉄道のラッピング列車「がんばれクマモト! マンガよせがきトレイン」をご紹介します。
総力特集
広げよう復興の輪!
SPIRITS FUKKO
ワンマン
後乗・前降
南阿蘇鉄道
FUKKO
撮影

一両編成の南阿蘇鉄道。ラッピング列車が広い青空に映えます。

電車の中も漫画のイラストだらけ。前代未聞の漫画列車をぜひ味わってください！

## 南阿蘇鉄道（通称・南鉄）とは？ Minami-Aso Railway

1986年に旧・国鉄高森線を引き継ぐ形で第三セクターとして開業した（本社・熊本県阿蘇郡高森町）。全長17.7km、10駅の小さな鉄道だが、豊かな自然の中を走る路線が人気で、2015年度には外国人観光客が6万8000人も利用した。人口6600人あまりの高森町の重要な観光資源として、地元住民の足として、活躍している。しかし2016年4月の熊本地震に伴う土砂崩れで線路が流失、トンネルや鉄橋も甚大な被害を受けた。現在は全線の半分、5駅での運行が復活しているが、全線開通の見通しは立っていない。

GANBARE KUMAMOTO! MANGA YOSEGAKI-TRAIN

「ドラえもん」、「名探偵コナン」から「アフロ田中」まで。人気キャラが勢揃い！ 両側面には、応援色紙がズラリとラッピングされています。

『復興特集』は193Pから掲載。熊本を走る全イラストも公開します！

のりつけ雅春「熊本復興ツーリズム」ルポから
サッカー発「スポーツの持つ力」、
吉田戦車「復興&復興支援考」まで。
あなたにも心を寄せてみてほしい。そして皆で——

# 広げよう 復興の輪!

熊本地震から1年が経ちました。
東日本大震災から6年、阪神・淡路大震災からは22年が経っています。
「復興」——当事者でなければ日頃なかなか向き合うことの少ない言葉かもしれません。
でも被災したその日から今日までずっと、歩み続けている人達がいます。
支援の手をさしのべている人達がいます。
復興を考えることは皆の未来を考えることではないでしょうか。
だから、少し心を寄せてみてほしいんです。
進んでは立ち止まり
そしてまた進んでいる誰かのことに——
そんな思いで今回の特集を組みました。

次ページで「マンガよせがきトレイン」に寄せられた117名の応援イラスト一挙公開!!

全メッセージイラスト!!!!
熊本を応援した
熊本出身の編集部員の思いから始まりました。
それが特集企画としてスピリッツ編集部、小学館の全コミック誌編集部へ
総勢117名の漫画家・原作者の方々が参加するプロジェクトになりました。
こうして集まった全メッセージイラスト、ぜひご覧ください！(順不同)
さいとう・たかを
YASCORN
FUKKO

特総集力
広げよう復興の輪
がんばれクマモト！
マンガよせがきトレイン
SPIRITS

# 漫画を乗せた列車が阿蘇を走るまで

取材・文 神田憲行

## 南阿蘇鉄道の今——

南阿蘇鉄道は約30年間、地域の脚、重要な観光資源として地元住民に「南鉄」の愛称で親しまれてきた。それが昨年4月の熊本地震によって大きな被害を受けた。とくに立野地区に二つあるトンネルはどちらも崩落して内部は亀裂、二つの橋梁も損傷し、地崩れの土砂により線路が流出した。被害調査が国の支援で始められているが、取材時点(3月19日)でまだ確定していない。

○震災前、トロッコ列車が走る第一白川橋梁。現在は桁げたの損傷が激しく、南阿蘇を彩る美しい風景はいまだ戻らない。

南鉄の津留恒営業専務は「現場を視察するたびに、新たな被害状況がわかる感じです。復旧工事費は数十億円も予想されますが、会社の売り上げは地震前と比べて85%減になりました」

それでも昨年7月に路線距離の約4割に当たる高森駅から中松駅まで復活させるなど、奮闘が続いている。

南鉄完全復活を目指すプロジェクトチーム「南阿蘇鉄道復旧支援対策実行委員会」事務局である高森町役場の職員・村上純一さんは、「南鉄は街のリズムを刻む時計のようなもの」と話す。

「地震前は列車の行き来を知らせる駅の遮断機の音がチャイム代わりに、子供の帰宅時間などを教えてくれていました。昨年7月にその音を久しぶりに聞いて、地震前の自分たちの生活のリズムを想い出しました」

○立野橋梁も第一白川橋梁と同様に、被害が甚大で、復旧の目途が全く立っていない状況。

## 皆の手で作った列車。

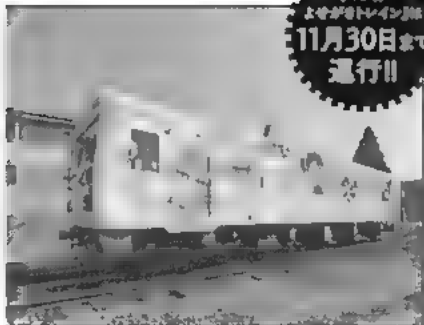
今回の「がんばれクマモト！ マンガよせがきトレイン」は、その復活プロジェクトの目玉のひとつだ。漫画家117人から寄せられたイラストや色紙の原画を受け取った村上さんは「すぐ防火金庫にしまいました。何があってもこれは守らないといけないから。個人的にはいつも楽しみにしている『アフロ田中』の絵に感激しました」と笑う。南鉄の津留専務も「1枚ずつ丁寧に拝見しました。私たちへのメッセージを書き込んでくださった先生もいて、想像以上の作品でした。感謝、感激の言葉しかありません」

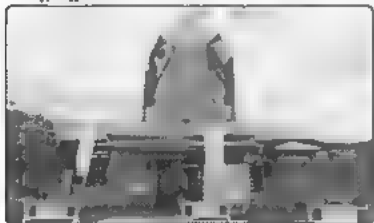
車両の装飾を手がけたのは九州デコラ株式会社の田島寿昭社長だ。

「作家さんごとに絵のタッチが全然違う。うまく印刷で再現するのに苦労しましたが、やり甲斐がありました」と語る。当初は車体のラッピングのみの計画だったが、田島さんのアイディアで車内に色紙のレプリカの掲示もする。「車体を見るだけでなく乗って、

○○ラッピング列車のデザインを担当した九州デコラの皆さんが、列車の内部の装飾も丁寧に行ってくださった

FUKKO

『マンガよせがきトレイン』は11月30日まで運行!!

南阿蘇の湧き水の代名詞とも言える白川水源が沿線にあり、中松駅では汲みたての湧き水を飲むこともできます。また土日祝日限定で運行するトロッコ列車が11月30日まで楽しめます！ トロッコ列車、『マンガよせがきトレイン』の詳しい情報は南阿蘇鉄道HP（http://www.mt-torokko.com/）まで。

TAKAMORI STATION

## 【南阿蘇鉄道・高森駅への行き方】

●お車をご利用の場合

阿蘇くまもと空港から県道28号線（俵山バイパス）を通り、阿蘇の雄大な自然の中をドライブしてください。国道325号線に出て、高森駅に到着。JR熊本駅より約2時間、阿蘇くまもと空港より約1時間です

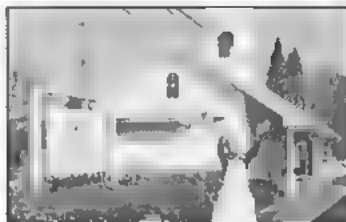
●お車をご利用の場合

熊本駅前、阿蘇くまもと空港からも乗車できる産交バス「快速たかもり号」が1日3便運行中です【詳しくは産交バスのWebサイトでご確認ください】http://www.kyusanko.co.jp/sankobus/rosen/takamori

素晴らしい色紙を間近でぜひ見てほしい」

取材当日、この春から鉄道専門学校に進学予定の鹿児島からきた18歳の青年に会った。

——「南鉄は自然の中を走る雰囲気が好きで、もう三度乗っています。鉄道好きには有名な路線なんですよ。ラッピング電車にも乗りたいし、早く全線復活してほしい」

南阿蘇鉄道の沿線は雄大な阿蘇を見ることができる。その山容が猫のようにギザギザになっていることから「根子岳」と呼ばれる山も面白い。阿蘇の風と光をぜひラッピング列車で感じていただきたい。

◎沿線の阿蘇白川駅では"名物お母さん"であるおばあちゃんが手を振ってくれるなど、駅ごとの楽しみも！

この風景の中を『マンガよせがきトレイン』が走る!!

写真撮影

「がんばれクマモト！ マンガよせがきトレイン」

## プロジェクトメンバー

**車両および運行**
○南阿蘇鉄道株式会社

**車両デザインおよびラッピング**
○九州デコラ株式会社

**色紙製版**
○江戸製版印刷株式会社

**ロゴおよびメインビジュアル作成**
○株式会社ベイブリッジ・スタジオ

**イベント主催および企画**
○南阿蘇鉄道復旧支援対策実行委員会
○高森町役場政策推進課

**協力**
○熊本県知事公室 くまモングループ
○熊本県企画振興部交通政策・情報局 交通政策課
○熊本県東京事務所・銀座熊本館
○117人の漫画家・原作者の皆様
○小学館各コミック誌編集部
子ども/メディア開発室 ちゃお編集部 少女コミック編集部 ベツコミ編集部 Cheese!編集部 プチコミック編集部 flowers編集部 コロコロコミック編集部 少年サンデー編集部 ゲッサン編集部 ヒバナ編集部 ビッグコミックスペリオール編集部 ビッグコミックオリジナル編集部 ビッグコミック編集部 ビッグコミックスピリッツ編集部

**企画**
○小学館・南阿蘇鉄道マンガよせがきトレイン事務局
ビッグコミックスピリッツ編集部

●取材 川俣綾加、スピリッツ編集部 ●デザイン 石沢将人+ベイブリッジ・スタジオ

熊本地震直後の5月、ボランティアに駆けつけたのりつけ雅春氏。
この度、9か月後に熊本を再訪しました。
そこで見た、復興の現在。そして考えた、未来のためにできることとは——

羽田から2時間弱。意外に近い、熊本です。

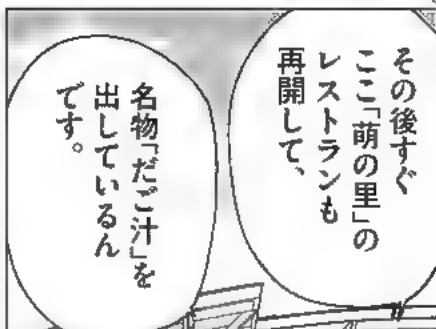
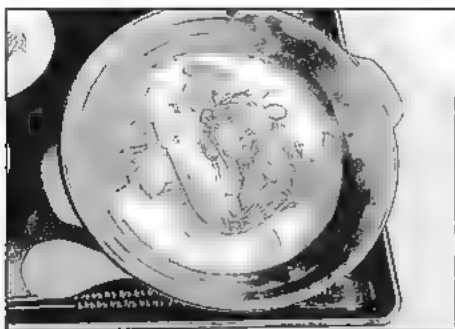
こんなにでかかったのかー‼
熊本城ー‼
前は見なかったんですね。


お知らせ
地震被害のため
立入禁止


………
めっちゃ崩れてるなあ…


地元の人には衝撃だったろうなあ。
生まれた時からある城が、
こんな姿になるなんてな…
SPIRITS

崩れた石垣の岩に、番号ふってありますね。
こ…これを…組み直すというのか?
当時城を作った人達もすごいけど、
これを直すというのもすごい…
復旧に20年かかるそうですよ。
20年!!
西原村の、9か月前にボランティア作業で来たお宅にも来てみた。
わっ。
更地になってる!
当時はどうだったんですか?
……
当時はこの辺ほとんどの家に赤い紙が貼られててねぇ。
落ちた瓦の撤去とか、
色んな作業を家の人がやっていたから、
それをボランティア仲間達と手伝ってたんだよな。
……人間ってすごい!

お――――!
道が通っている!
この道は当時はすごかった…
この俵山トンネルは、昨年末開通したそうですよ。
おお!! 通れなくてめっちゃ大回りしてたんだよ!!
その後すぐここ「萌の里」のレストランも再開して、
名物「だご汁」を出しているんです。
だご汁…?
うんまい!! コレ!!
初めて食ったよ!! うんま――――!!

まだ完全に復興しないうちから、名物を食べさせてくれるなんて!!

人間ってすごいなあ…!!

こうして熊本に遊びに来るだけでも、その助けになるのかもしれないなあ…

ゆずこしょう、入れるとやばいっスね。

うんま!!

一歩一歩進んでいる熊本、頑張るばい!! 『しあわせアフロ田中』本編は111pから、巻中カラー!!

【のりつけ雅春(『アフロ田中』シリーズ)が行く、熊本復興ツーリズム/完】

熊本在住漫画家による特別描き下ろし漫画！

# 揺れるペン先 〜熊本締め切り地震〜

ミナサマ こんにちは。5年前に故郷である熊本県に住まいを移し漫画を描いております村枝です。

したら…熊本が揺れた。震度7が明治22年以来地震のない国 熊本を、そして ついでに俺の締め切りを襲った!!


30
村枝賢一
（「俺たちのフィールド」、現在「月刊少年マガジン」で「新 仮面ライダーSPIRITS」を連載中。）


俺の住む芦北町は県南にあり、大きな被害は無かったが、それでも震度5強。

東京で東北大震災の余波を経験している娘はグーグー寝てましたが…

飲み屋から避難してきた人達が見知らぬ物を見て尋ねた。

つっぱり棒

あら なんな

？

それ程 地震とは縁遠いものだったのだが…

一夜明けて 被害の大きさに呆然。道路被害で動けず 被災地情報を眺めるばかり。

ヴヴ

高速ダメ 飛行機ダメ 東京のスタッフに原稿も送れない。※

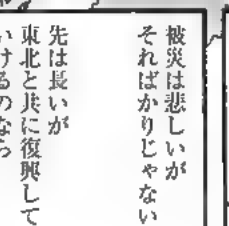
こうなったら 意地でも 載せちゃる。

アナログ

※普段は宅急便で原稿を送りネットで指示。

溜まっていく無力感。

だがヒーロー漫画を連載している俺には熊本北部大津町に心強い縁があった。

大津町

スーパーローカルヒーロー「グランパワーヒノクニ」だ。彼ら自身も被災していながらも避難所で落ち込む子供達を元気づけた。

ブレイズレッド

ブルーセイバー

あっちむいてホイで配ったうまい棒の数なんと一万二千本。彼らは本当にヒーローだった。

サイン会

それと後に聞いた話だが、なんと東北ナンバーの車が物資を届けてこう話したらしい。

あの時のお礼です。

被災は悲しいが そればかりじゃない。先は長いが東北と共に復興していけるのなら悪くないと思う。

しめきりまにあった

はじめてのデータ入稿

大震災の時にも手伝われた方が何人かいました）、コミュニティーが広がっていきました。

最初の1週間は、倉庫で物資を下ろして、飲み物、食べ物、衣類、ベビー用品、衛生用品などに仕分けし、配送車に積み直すという作業をひたすらしていました。多い時は1日10回くらい配送車が出入りしている時もありました。ほとんど倉庫から出られませんでしたね。人手が足りずロアッソのメンバーに協力してもらったことがあったのですが、いつも一緒にサッカーをやっているからチームワークバッチリで、あっという間に作業が終わっちゃうんです。サッカー選手ってすごいですね（笑）。

子供たちへのサッカー教室もやりました。ロアッソのチームメートと、「ボールは俺が持って行くよ、ゴールはあそこから持っていこうか」と分担して準備して。子供たちは楽しそうにサッカーをしてくれたんですが、**そしたら、僕らもすごく嬉しくなったんです。**切羽詰まった、ずっと緊張している中から解放された気分というか、つられて、周りにいる子供たちの親や、おじいちゃんおばあちゃんたちも笑顔になってくれて　スポーツにはそういうチカラがあるんですね。

©KUMAMOTO

今回の熊本大地震の被災者のみなさん
亡くなられた方々お悔やみ申し上げます

その後、**「YOUR ACTION KUMAMOTO」という募金サイトを立ち上げた**のですが、僕ら信じられないくらい反響がありました。日本のサッカーファミリーと言えばいいのでしょうか、いろんなチームのサポーターや、サッカーファンが支援してくれました。募金は、基本的には熊本のスポーツ活動支援、特に子供たちの活動に使っています。

そうこうしているうちに5月15日にJリーグが再開しましたが、なかなか勝てませんでした。1か月間サッカーをしなければコンディションは落ちる。オフシーズンでさえ丸々1か月サッカーをしないということはありませんから。

順位が下がる中、踏みとどまらせてくれたのはサポーターたちの想いでした。

印象的なエピソードがあります。僕はよく避難所に物資を届けに行っていたのですが、そこに住んでいたおじいちゃん、おばあちゃんが**「試合観にいったよ！」と声をかけてくれたのです。**また、試合後、チームバス乗降場にあるファンサービススペースで、避難所で会った子供が、「僕を覚えてますか？」と声をかけてくれたこともありました。もう、嬉しいなんてもんじゃなかったですよ！

復興で本当に大事なことってなんなのか、何度も何度も考えましたが、「壊れたものを取り戻すことが復興ではない」と僕は思います。地震があって僕らは前より強くなっている。人とのつながりも大きくなっている。震災前よりも素晴らしい熊本を作ることが復興だと思っています。

「アオアシ」の小林有吾先生、熱筆！
ロアッソ熊本のユニフォームを着たアシト!!

つたんですね。全く気づかなかった(笑)。そんなことも忘れるくらい震災直後は動いていましたね。

ベガルタの再開初戦は4月23日の川崎フロンターレ戦に決まりました。だから練習しないといけないのだけれど、復興支援もしたい。通常であればキャンプをしていたら午前も午後もみっちり練習するのですが、そんなことは考えませんでしたね。泥かきや瓦礫処理を手伝って練習もして。サッカーの技術を上げるよりも、人間力を上げるために、それが必要だと思いました。でも、そうすると結果的に1回の練習の質がものすごく上がったんです。

■仙台 ■左が手倉森監督

Jリーグ再開後、忘れられない試合がありました。

2011年4月29日、震災後の最初のホームでの試合。相手は浦和レッズで、アウェー席は赤いユニフォームを着たレッズサポーターでいっぱいです。いつもだったらアウェー席からはレッズコールが鳴りやまないのですが、ベガルタの選手がピッチに上がると、なんと**浦和のサポーターから拍手が起きたんです**。さらに感動したのは、観客がホームもアウェーも関係なく手を取り合って、両手を上にかざしたのです。あれには本当にグッときましたね　サッカーファミリーと呼ばれているサッカーファンの絆の深さを感じました。

その後、チームは非常に好調でしたが、夏場、4試合連続で引き分けるなど勝てなくなってしまいました。理由はガス欠です。そこで私は、「突っ走って勝ち続けられるようだったら化け物だろ。お前たちは人間だ。**自分たちがミラクルを起こせるわけではない**ことを思い知らないといけない」と選手たちに話しました。「これまで勝ってこれたのは、ベガルタが強くなったんじゃない。相手チームサポーターはもちろん、仙台サポーターも仙台が勝ってほしいと思ってくれているからだ」とも。

熊本の震災後、私は熊本に行って、ロアッソ熊本のスタッフにその時のことを話しました。そして、「絶対にやりすぎてはいけない」と言いました。パンクしてしまうからです。特に地元に強い想いがある人は、俺がなんとかしてやると思ってしまいます。でも、一人では何もできません。だから**仲間を作らないといけない**と思います。

スポーツクラブは、うまくいけば被災地の「希望の光」になりえるんじゃないかと私は思っています。でも、復興は時間がかかるので長期戦で考えないといけません。地震は、1回来たからといってまた来ないわけではない。そういったことも考えながら復興しなくてはいけません。

## バスケットボール界ではこんなイベントが開催!

昨年8月24日、「熊本地震復興支援 B.LEAGUE チャリティーマッチ 九州選抜 vs B.LEAGUE選抜」が開催! 平日夜にも関わらず、会場となった東京・代々木第二体育館には2,000人以上の観客がつめかけた。中にはなんと熊本から応援に来ていたファンの姿も! 試合は大白熱! 延長戦で九州選抜が逆転勝利となった!!

**九州選抜キャプテン・小林慎太郎選手からメッセージ!**

たくさんのファンがかけつけてくれて嬉しかったです、くまモンとプレーしたのもいい思い出ですね(笑) 所属する熊本ヴォルターズは来季、B1昇格を目指して戦っています 熊本を応援してくださるみなさまのために ぜひとも達成したいです”

©VOLTERS

文　上野直彦

支援したい気持ちは、ずっとある。自分なりの復興を考えるドキュメンタリーまんが。

吉田戦車

FUKKO

岩手県沿岸部、

被害の甚大さに言葉を失う。

【吉田戦車】漫画家。1963年8月11日、岩手県水沢市（現・奥州市）生まれ。1991年に著書『伝染るんです。』で文藝春秋漫画賞受賞。近著に『おかゆネコ』（全7巻）、『まんが親』（全5巻）。

これはやっぱり他人事で終えるわけにはいかないな。
SAVE IWATEさんにいろいろスケジュールを組んでもらう。

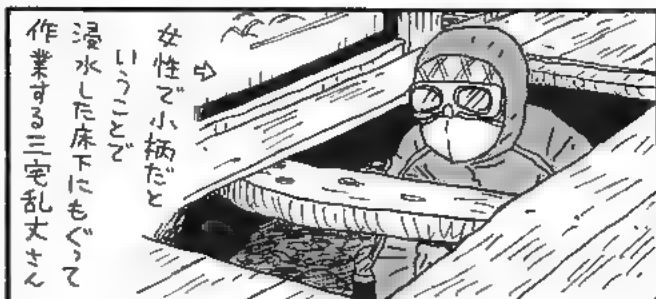
【SAVE IWATEとは】2011年3月11日の東日本大震災直後から、盛岡を拠点としてボランティアを募り被災者支援を開始。現在もさまざまなアプローチから復興支援活動を行っている。

肉体労働は当然なくなっていきマンガ家らしいイベントがメインになってきた。

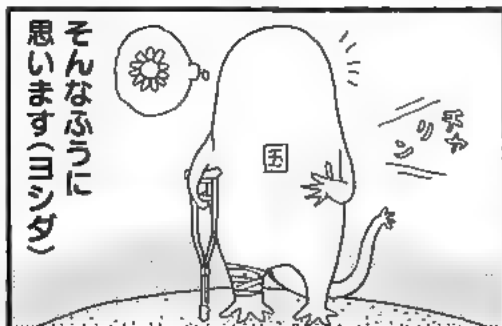
ジバニャン？ちょっと待って検索…

2014年 越喜来 仮設の集会所で

そして2016年熊本地震

その秋、台風10号災害 SAVE IWATEも岩泉町で復興作業をしているというので我々も手伝うことに。

女性で小柄だということで浸水した床下にもぐって作業する三宅乱丈さん

【食べて応援】SAVE IWATEが行っている被災地・三陸の雇用創出のために生まれたのが、岩手の伝統食・和グルミの加工・販売する「三陸の和グルミプロジェクト」。ネットショップからも購入可能。

[SAVE IWATEホームページ] https://sviwate.wordpress.com/

少しずつ、でも、ひとりひとりの働きが、大きく癒やすのだ、世界を。

[復興ってなんだろう? 復興支援ってなんだろう?/完]

**富山まゆみ（富山真弓・富山真里子）**
**漫画家　東京都（熊本県出身）**

震災後、帰熊する機会が増えました。タクシーに乗る機会も増えます。ある運転手さんの話

「私は本震の時、市内を流してててね。公園の池とかに手こぎボートあるでしょ。あのボートにふざけて立ち上がった時みたいな感じでしたよ。怖かったですね」

別の運転手さんの話

「お隣のおばあちゃんが来て、南阿蘇に親戚がいるんだ、何もから乗せてくれってね。本震の翌日でしょ、気の毒だけどとても無理ですって断ったんです。手を合わせられてもねえ…」

「益城なんですよ私。家全壊しちゃって、家族は避難所。側にいてやりたいけど、こうやって仕事できるだけ幸せですよね」

私たちの実家の周辺はほとんど被害がなかったので、行き先を告げると「良かったですね」と言ってから自分の話をする運転手さんに数多く出会いました。報道だけではわからない現実に、今も考えさせられます。

**古澤 愛(32)**
**主婦　熊本県阿蘇郡**

被災してすぐは毎日のように泣いていました。住んでいた家から離れ実家に避難、自宅への道がなくなり立ち入り禁止。どうなっているのか確認することもできない。不安な中、私を笑顔にしてくれたのは子供たちの笑顔とお腹の赤ちゃんの胎動でした。私が暗い顔してたら子供たちの笑顔まで失ってしまう。そう思い、できるだけ笑顔で過ごすようにしました。周りの方の励ましの声や家族との時間が、私を心から笑顔に変えてくれました。

なぜ熊本が、何度口にしたことか。今まで色んな場所で震災が起こるたびに大変だな、可哀相と思っていただけで、たいした支援もできないでいました。今回の震災で、人の声、行動一つ一つがこんなにまで温かいんだと感じることができました。今はみなし住宅に住んでいますが、できるだけ早く戻り、地域の方と一緒に村を盛り上げていけたらと思います

**園田久美代(60)**
**にしはら保育園園長　熊本県**

1年前の4月16日、実家で一人暮らしだった83歳の母は家屋の下敷きとなって亡くなりました。14日の前震の後、私たちの家に来るように言ったのに「亡くなった父ちゃんがおらすけん」と言って聞かなかった。夢であってほしかった。しばらく受け止めきれませんでした。

救いだったのは保育園の仕事です。避難所でもあったから大忙し。村長も心配してくれたけれど、39年間、台風でも休園しなかったんですから。最初はトイレも流せず2か月は水も飲めない。園児や保護者も水筒、弁当持参で協力してくれました。避難していた子も戻ってきて、一人も欠けることなく卒園できそう。子供たちが愛おしくて、命の重みを改めて感じた1年。私もこの春で退職です

**大谷幸一(51)**
**西原村大切畑地区　前区長　熊本県**

西原村大切畑地区は26戸約90人、山奥の小さな集落。1年前の地震ではほとんどの家が倒壊しました。しかも9人が家屋の下敷きに。でも奇跡的に犠牲者は出ませんでした。夜明けとともに住民が協力し、ジャッキやチェーンソーで救い出したのです

私は通勤圏ですし、水道屋の住民もいる。ここまでの復興は重機やダンプで瓦礫にふさがれた道路を開くのも、公民館に仮設のトイレや風呂を置くのも自分たちで取り組んだ。顔の見える人間関係があったから、団結できたと思います

ただまだまだスタートラインです。先祖から続く家屋や墓は倒れたままで、集団移転の話はあっても交渉はこれから。それでもやっぱり助け合うしか、先に進む方法はないでしょうね。

の今。
ことがあります。
いをお伝えします。

**水野潤二(45)**
**医師　熊本県熊本市**

一度、避難した車で家族の無事を確認した。あと職場へ向かいましたが、普段は信号機や看板で明るい幹線道路すら真っ暗で、車で移動中にも感じる大きな余震に、鳥肌を立てたことを覚えています

職場ではすでに同僚たちが患者さんを移動させている最中でしたが、どこが本当に安全な場所かわからず、おまけにスプリンクラーの配管が壊れたことで天井から滝のような水が落ちたり、自家発電のわずかな灯を頼りに、なんとか一人のけが人も出さず一時避難が終了しました。

飲料水は院内にある分だけ、厨房は使用困難、物流も止まり、3日間はおにぎりとインスタント味噌汁だけという状態。1週間後、通常営業が可能となった日、平穏の素晴らしさをしみじみと実感しました。それぞれの医療機関の踏ん張りと、発災数時間後には駆けつけてくれたDMATはじめ、全国からの支援チームにも大変勇気づけられました。またSNSを通したSOSがかなり有効に機能していたことは新鮮な驚きでした。

今は心身が傷まれた方に対するケアに打ち込むことしかできませんが、「あたり前」に感謝しながら仲間たちと一緒に前を向いていきたいと思います。

**満田純一(66)**
**塚原仮設住宅自治会長　熊本県**

現在私は、熊本市南区の塚原仮設団地で自治会長を務めています。ここは熊本地震で最も早く建設された仮設団地で、現在93世帯240人弱が生活しています。自治会も当初から立ちあがり、仮設団地内におけるコミュニティー作りに前向きに取り組んで来ました。

積極的にボランティアを受け入れ、週2〜3回はサロン活動や自治会のイベントを開いています。仮設団地の住民からもボランティアの手が挙がり、現在カラオケ、演劇遊びの各教室があって楽しいです。

当初はサロンへの参加をためらっていた方も、徐々に参加するようになってきており、住民同士の絆も生まれつつあります。今後生活再建が叶った後もここで作り上げたコミュニティーを大切にしていきたいですね。

**「みんなの食卓 阿部食堂」(44)**
**パートタイマー**
**熊本県阿蘇市**

熊本地震直後、夜明けと共に心が一つに。近所の総勢30人程で目の前の現実と戦いました。その日の夜から衣食住の確保です。ビニールハウスの寝床、納屋での食事。全て役割分担で働き、自然と個々の、惜しみない、力強い前向きな気持ちでやりました。

寝床は余震でも皆が居れば爆睡できました「笑」。食事は皆が居れば笑える！ 心の余裕が出来たのは見知らぬ方々からの温かい心、支援です。これが一番の力ですね。「ありがたい、頑張れる！」に変わり、自主避難生活が2か月ほど続きました。あー楽しい、もっと勉強しとけばと後悔ばかりでした。泣く暇もなかった日々。最後に、つながりって最高。凄いですね♪

**児玉マイ子(82)　熊本県阿蘇郡南阿蘇村**

被災当初は体育館での避難生活、娘の嫁ぎ先、ホテル避難所を経て、今はみなし仮設のアパートに入居して7か月が過ぎようとしています。

自宅は4月16日の本震で危険土地、危険家屋となり立ち入り禁止。家屋は一部損壊でしたが、6月の豪雨による土砂災害で半壊となり止む無く移転を検討、土地を探すことになりました。

昭和ひと桁生まれの私は、戦争や貧困、また本家に嫁ぎ苦労の人生でした。今は娘夫婦と暮らし、曾おばあちゃんにもなることができて幸せを十分感じているのですが、12月中旬から原因不明の虚脱、倦怠、食欲不振に見舞われ、救急病院で診察するも異常無し。

病院では昼間ひとりっきり。大好きな家庭菜園もできず、心和ます季節の花もなければ、炎天下での草むしりもできず、気がつけばベッドに横たわってばかりの毎日。久しぶりに家に帰ると、同世代の家は次々に解体され、変わり果てた地域の姿にただただ涙がこみ上げてきました。

このような私を見かねた家族が行政に相談し、健康センターでの予防教室に行くと、ゲームや知人との会話がとても楽しかったです。きっと私と同じような寂しい思いをしている方がたくさんいると思います。人との関わりが、私のような高齢者には大切なこと

だと改めて知りました。

**前田佳代子(39)**
**御厨仮設住宅自治会 会計 熊本県**

仮設住宅に入居したのは昨年8月。両親と私たち夫婦、そして中1から小1までの3人の子供の7人家族です。もちろん避難所の外に広げたブルーシートの上で身を寄せ合った震災直後からすれば、復興への一歩。でもそれは私たち大人の目線で見た風景で、子供たちにとっては大切な遊び場がありません。駐車場は車でいっぱい、スポーツ施設は利用料が要りますから。

だから自治会では地元強豪の国府高サッカー部に遊びにきてもらったり、クリスマス会をやったり、ボランティアの方の力も借りて「今」という宝物の時間を楽しんでもらえるよう心を砕いています。

お年寄りだってそう。籠っていては体に毒で、いろんな住民の方を一緒に巻き込んでいけたらいいですね。

**米原秀亮(41)**
**ロアッソ熊本 MF 熊本県宇城市出身**

熊本地震が起こった時は、ロアッソ熊本ユースに在籍していました。震災後、ユースの仲間たちと「子供サッカー教室をやりたいね」という話が出ました。クラブの方とも相談し無事開催できまして、子供たちと一緒にパス交換や、ゲームをやりました。ゴールを決めて本当に嬉しそうな子供たちが印象に残っています。子供たちを励ましに行ったのですが、練習もロクにできず落ち込みがちだった僕らが、逆に励まされる形になりました。僕は今年1月からプロ選手に昇格しました。一生懸命にプレーして、熊本の人をどんどん笑顔にしていきたいです!

**生野敏嗣(46)**
**湯布院温泉観光協会事務局長**
**大分県**

熊本地震では大分も被害を受けました。湯布院温泉も震度6弱で、特に建物内部が被害を受け、いくつかの建物も被害が出ました。それにより4〜6月にお客様が来られなくなりました。その間、温泉宿の方々は改めて、湯布院の今後を見詰め直す機会ができました。その中から、例えば町中に花を植えてきれいにするなどの取り組みもありました。また近隣にある熊本の黒川温泉とタッグを組むこともできました。湯布院のお客様に黒川温泉を紹介し、黒川温泉もお客様に湯布院を紹介するなどするようになりました。連泊割引なども設けました。こうしたかたちで、震災をきっかけに新たな取り組みもでき、復興につながっていると思います。

**中島晶彦(35)**
**阿蘇神社復興支援代表・映像ディレクター**

実家の阿蘇市に帰省していたタイミングで熊本地震に遭遇し、実家の側にある阿蘇神社でボランティア活動を続けています。神社という場所を震災まで特に意識したことはありませんでしたが、お宮参りや七五三、結婚式など人生の節目に関わってきた場所が潰れてしまい、居ても立ってもいられず活動を始めました。

国の重要指定文化財の建物に対して行政の復旧支援が決まる中、指定されていない建物は全額神社の自己負担。その額は数億円にのぼります。その状況を知っていただく為に神職の方や地元の方のインタビューを短い動画にまとめ、ユーチューブで配信しています。再生するたびの広告収入が全額、阿蘇神社に寄付される取り組みです。この活動は、募金をせずとも見るだけで支援につながりますので、ぜひご覧いただければと思っています。

**井戸主税(38)**
**OKPROJECTメンバー・GREEN NOTE 熊本県熊本市**

震災後、小商いの売り上げは低迷し、このままでは存続できないお店が出るのでは? と頭をよぎりました。そこで皆が小商いを継続できるためのOKPROJECT(O＝大分・K＝熊本)を立ち上げ、まずは県外へ足を運びマーケットを開催してきました。売り上げは勿論、沢山の方と出会い、絆が見えるつながりができたことは財産になりました。

現在は普段の生活を取り戻していますが、まだまだ小商いの状況は様々な問題を抱えています。アクセスの問題で集客が困難な地域や、お店が被災し店舗のない状態で活動されている方もいらっしゃいます。私は地域形成に小商いは欠かせないものだと思っています。今後も少しずつですが活動を続けていけたらと思っています。

# 「人の声、行動一つ一つがこんなにまで温かいんだと…」

**吉澤佳乃子(21)**
**大学生 熊本県**

新学期が始まったばかりだった1年前の4月、震度7の地震に2度も襲われた益城町は私が生まれ育った町です。そんな大切な町の復旧・復興のために、学生の私でも何かできることはないかと思い、大学内にあるボランティアセンターを訪ねました。

センターの紹介で町の小学校の学童保育や県内で開催されるイベントのお手伝いをしています。また若者が中心となって活動するプロジェクトにも参加しています。これからの未来を創るには若者だからこそ発揮できる"チカラ"も必要だと思っています。

地震直後と比べボランティアは減少傾向にあります。輪を広げ、継続的に行うことが大切だと思っています。

**伊藤秀一(44)**
**東海大学農学部准教授 熊本県**

私の職場である東海大学農学部は阿蘇の動植物たちや自然に支えられてここまで来ました。震災により阿蘇のキャンパスから熊本市内に一時移転したときは絶望的な気持ちになりましたが、現在はいろいろな皆様に支えていただいて、大学での教育を続けることができています。特に熊本市動植物園の皆様は、大きな被害を受けたにも関わらず、私たちに大きな力を貸してくださいました。

私自身は何が復興につながるのかを必死に考え、最終的に「人を育てること」が重要だと気がつきました。この熊本の地で、動物学や農学を学生さんに学んでもらって、熊本へ、全国へ、そして世界へ羽ばたいてもらいたいと思っています。

**Kwabena(37)**
**写真家 熊本県**

私は南阿蘇村で牛や豚を飼っています。幸い地震が起こっても家畜は無事でしたが、地震直後は停電と断水で大変な思いをしました。発電機でなんとか搾乳をこなしましたが、水はまったく回る見込みがなかったので、近くの沢まで1日2tの水汲み。その作業が2か月続きました。命を預かっている以上守らないといけないと必死にやってきました。

震災前は自宅から仕事場までは車で20分程度で行けていましたが、橋の崩落や土砂崩れの影響で回り道して今は1時間ほど通勤にかかってしまっています。道路の復旧にはまだまだ時間がかかりますが、今自分がすべきこと、動物たちの命を守ることに専念しています。

**細 秀帆(25)**
**動物飼育係 熊本県**

熊本市には江津湖という大きな湖があります。普段は市民の憩いの場として賑わいを見せています。しかし地震が発生してからは地盤の液状化や崩落があったため立ち入りが制限されており、人もまばらで、いつものような活気はありませんでした。本震から2か月ほど経過し、余震が収まりつつあるころには修復工事も進み、今年の2月には江津湖に隣接する動物園が一部分だけ再開しました。子供たちが楽しそうにしている姿をみると、少しずつでも復興していると実感します。

すべてが元通りになるわけではありませんし、まだ復興できる段階ではないところもあります。それでも少しでも良くなるように頑張っていきたいと思います。

**野崎由美(31)**
**大学院生**
**熊本県**

熊本地震から約10か月が経ち

# 「震災によって、家族とは、政治とはなど、色んなものがむきだしになったのを感じます」

ました。今なお地震の爪痕は残っていますが、皆さんの温かい支援や、熊本に住む人たちの力強さやたくましさによって、楽しく安心して生活することができています。私が通う南阿蘇の大学は甚大な被害を受け、今はキャンパスを変えて学生生活を送っています。そんな中、新たに授業や実習の場所を提供してくださったり、復興ライブを開催してくださったりと、多くの方々に支えられ勇気づけられました。今後いろんな形で恩返しできればなと思います。一方で、時間とともに地震の恐ろしさや危機感が薄くなっていることも実感します。自分の経験もふまえ、より多くの人に伝えていきたいです。

**生島ヒロシ([illegible])**
**フリーアナウンサー／東京都**

熊本の被災地には、ラジオ番組の取材も兼ねて行きました。私は気仙沼出身なので東北の被災地にも行っていますが、熊本の仮設住宅や避難所の設備はプライバシー保護などのレベルがアップしていました。が、その分、新たに「孤立」の問題が生じ、それへの対処が求められる。まだまだ避難所も進化させねばならないと思います。

**松尾紀子([illegible])**
**IT企業 次長 熊本県**

熊本大地震が発生し、予想もしないようなことが阿蘇で起こりました。阿蘇の商品だけをとりあつかうインターネットショッピングを運営していたので、復興支援セット（複数の店舗さんの商品をセットにしたもの）を、全国の方に沢山買っていただき、助けていただきました。同時に励ましの言葉もたくさんいただき、乗り越えることができたと思っています。

現在は、忘れたい震災だけれども風化させないようにして、もしもの時の備えだったり、人の温かさだったりを未来へ残して、次の世代の教訓となればいい

など思って活動しています。阿蘇は元気です！ 遊びに来てください！

**山本汐莉(16)**
**高校2年生 熊本県**

1年前、いきなりの震度7で慌てて外へ。「家の中に戻ることもできず、車の中で一晩を過ごしました。さらに避難先の田の実家がある阿蘇で、今度は真夜中の本震。益城町に戻ってきたときはまた酷い状態でした。

それから一か月ほどの避難所生活は不慣れだったけれど、私の中で何かが変わったように思います。いろんな所から支援物資が届くし、被災者たってボランティアでお年寄りのお世話をする。私も食事の支度を手伝いました。「落ち込んでいる場合じゃないんだ」って。

それから若い世代で町の将来を話し合うイベントに3度参加しました。大学生や社会人の先輩と話していると、復興の先にも、と素敵な未来が見えてくるみたい。夏祭りで、益城の「ノェラート」をお披露目するんです。

**濱本伸司(41)**
**一般社団法人フミダス 代表理事 熊本県**

復旧したかに見える熊本ですが、地震に加え、阿蘇山の噴火により農業や観光など各産業がさらに大きなダメージを受けており、再建に向けての課題は山積みです。そんな中、熊本の復興のため、未来のために立ち上がろうとしているリーダーたちがいます。しかし、そのリーダーたち自身が被災していることによって、円滑に事業を遂行できていません。

フミダスの推進する「熊本復興・右腕プログラム」では、県内の復興ボランティアセンターや介護福祉施設、仮設住宅での健康支援プロジェクトなどにリーダーの「右腕」となれる「右腕人材」のマッチングを行ってきました。この事からは、阿蘇地域の温泉旅館組

合でリピーターづくりの仕掛けをつくっていくプロジェクトや、伝統野菜「阿蘇高菜」を軸に阿蘇地域の農業の新しいブランドストーリーづくりへのチャレンジなど、ひき続き人材の支援を行っていきます！

**草野紀視子(40代)**
**団体職員 長崎県**

熊本地震の映像を観て涙が止まらず、ひとりでは何もできないかもしれない！それでも、熊本地震の被災地へ！ 自分の車で行ける距離の場所、どうにか力になりたい！ その一心から動き出しました。

普通に食べたり寝たりできるだけで幸せなことそれをできない方々を助けようと思う心で、自ら被災地を回り支援を行い、ボランティアバスを長崎より走らせるような動きもして来ております。長崎新聞の「防災とボランティア週間」の記事として大きく掲載していただいたことで、たくさんの県民の方および熊本県の方からも応援やボランティアをしたいというご連絡をいただきました。今後もボランティアを継続をしたいと思っております。

**ムツゲン¥テーラー**
**ライブハウス難波三日月スタッフ／大阪府**

熊本地震の際、たくさんの漫画家の方にご協力いただき大阪のライブハウスでサイン色紙のチャリティーオークションを行い、皆様のおかげでかなりの額を寄付することができました。

僕自身は災害に直面したことは無いですが、メディアを通して世界中の惨状をリアルタイムで垣間見る中で「自分も被災する可能性はある。自分が困難な状況の時に助けてほしければ、誰かが困っている時には手を差し伸べるべき」と考えるようになりました。大金を送ることができなくても、皆が自分なら何ができるかを考えるだけで復興への近道になると思います。僕はサイン色紙のオークションでしたが、誰にでも貢献できる手段があるハズなんです。

**グランパワーヒノクニ〈炎の戦士ブレイズレッド・水の戦士ブルーセイバー・天空の戦士テラ〉**
**熊本の自然と子どもたちの未来を守るスーパーローカルヒーロー 熊本県**

暗闇の中で起きた終わりの見えないたび重なる地震は多くの子供たちの心に恐怖と大きな爪跡を残しました。家の中で寝ることができず車中泊を余儀なくされました。子供たちを少しでも元気にしたい

という思いから毎週日曜日地元の道の駅にてヒーローショーやお菓子、シャボン玉を配る活動を行いました。「漫画家の一村林賀 先生も一緒に活動し、我々の活動を知った全国の皆さまから、たくさんの応援をしていただきました。たくさんの子供たちの笑顔を見ることができました。ヒーローという非現実でありながら実在するみんなの力を集める大きな力がこの日本にはあると実感しました。

今後もグランパワーヒノクニという名前の通り、火の国熊本のみんなの力で夢と希望を届けることができるよう地道な活動を続けていきたいと思います。

**紫野真和(52)**
**新聞記者 熊本県南阿蘇村**

東日本大震災で岩手県大槌町に駐在し、熊本地震の後は南阿蘇村に駐在。東北にも通って両被災地の記事を書いています。大槌町は人口の1割弱を失い、南阿蘇村は全戸の3分の1が全半壊しました。震災によって、家族とは、政治とはなど、色んなものがむきだしになったのを感じます。そして、被災地の抱える課題は日本の課題と重なります。復興は、新たな実験の機会でもあります。日本の将来に役立つ種をまく場所でもあります。震災で郷土愛を再認識し、復興に役立ちたいと思う人たちもいます。読者のみなさまも、そういう目で関心を持ってもらいたいし、被災地を訪ねて友達を作ってください。

**坂口恭平(38)**

僕は逃げ足が早く、ねずみみたいです。3.11のときも3月15日には西へ向かい、故郷である熊本で新政府なんてものを立ち上げてしまい、避難してくる人のシェルターであるゼロセンターなどをつくりました。熊本の地震でも4月16日の夕方には東京へ逃げました。安心できる状態になってようやく頭が動き出すみたいです。

その後、すぐ5月の頭には東京で九州大震災復興ライブを2日間続けて行いました。熊本で僕の執筆の世話になっていた書店と、ライブをやらせてもらっていた早[illegible]倉庫の2か所に200万円ほど寄付ができました。あのときライブに来てくれた人には今も感謝してます。すぐに逃げるやつもいていいんです。

**山内康介(51)**
**京都まちづくり交通研究所プロデューサー(都市計画の専門家) 京都府**

熊本城が被災しましたが、その状況を踏まえて清水寺など古くからの観光施設の防災対策

例えば地下水路を設けることなどを行政などに働き掛けています。また、東北や熊本から修学旅行に来る学生から、京都での防災対策について質問されることが多くあります。そのときには、京都で古くから行われているご近所レベルでできる防災対策を説明しています。

**佐々川菜希(17)**
**熊本県立高森高等学校2年**
**熊本県阿蘇郡南阿蘇村**

高校に入学して南阿蘇鉄道で通学していました。今回の地震で列車が走らなくなり、通学支援の小型車で通学しています。車の窓から線路に生える夏草を見て、時間が止まってしまったような気がしました。

お世話になった南阿蘇鉄道の復興を、大好きなイラストで応援することができて本当に嬉しいです。世界でもカルデラを走る鉄道は珍しく、水と緑と雄大な大自然を進む列車の未来を考えながら描きました。全線復旧し、また多くの観光客や私たちで賑わう日を心待ちにしています。

**東 祐子(31)**
**キリンビバレッジ株式会社 マーケティング部 東京都**

16年冬、「日本をあたためたい」という思いから、「午後の紅茶」のテレビCM「あいたいって、あたためたい」篇を制作しました。CMの舞台となった熊本県南阿蘇村は阿蘇山の噴火以降、初のCM撮影。熊本地震の影響で運行が制限されている南阿蘇鉄道様の全面協力をいただき、「見晴台駅」での撮影が実現しました。現地の小学生や農家の方にもエキストラとして出演してもらい、炊き出しでは地元グルメも、いただきました。南阿蘇村の方々は前向きに温かく私たちを受け入れてくださり、私自身もたくさん元気をもらいました。CMを通して、南阿蘇の澄み切った空や美しい山並み、そこに住む方々の魅力を感じていただけると嬉しいです。

**今吉直哉(17)**
**高校生 熊本県**

新学期が始まってすぐ地震が発生し、慌ただしい印象が強く残っています。被災中は喜怒哀楽が目に見えるような日々で、その中でお互い助け合っていくことは大切だと痛感しました。

被災から時間も経ち、復興も少しずつですが進んできた気がします。地元のローカル線も部分運行になりましたが、通学には使えず、地震以降ずっとバス通学をしています。家を出る時間も1時間以上早くなり、帰るときの待ち時間も結構長いです。「元の生活に戻りたいか」と聞かれたら絶対戻りたいと答えると思います。僕はあと1年で高校生活を終えるのでいいのですが、またバスを利用する人たちのためにも1日も早い復興を願います。

**山本英明(22)**
**南阿蘇鉄道株式会社 運転士 熊本県**

南阿蘇鉄道へ入社して2年目。運転士として免許を取得し、晴れて運転業務に携わることのできることの喜びを感じていた矢先の熊本地震でした。まさか自分の会社が被災するとは、と思っていました。

震災直後より、全国各地からたくさんのご支援・応援をいただきました。その度に全線復旧に向けた活力となっています。全線での運行を行うまでは長い道のりかもしれませんが、この「マンガよせがきトレイン」を通してたくさんの方が南阿蘇へお越しいただくことが復興への一歩と思っています。たくさんの方のご乗車を心よりお待ちしてます。つなげよう、つながろう南阿蘇鉄道!

**川井 [illegible](57)**
**カメラマン・鉄道ブランナー 東京都**

南阿蘇鉄道は、九州のほぼ中心に位置する第三セクター鉄道。阿蘇山の険しい谷を越える鉄橋は阿蘇観光のランドマークでもある。震災ではこの周辺が大きな被害を受けた。世界中から観光客を集め、鉄道の黒字も見込めた矢先の出来事だ。被害は大きく会社単独での復旧は不可能。まずは関心を持ってもらいたいと鉄道カメラマンが集まり、チャリティー展を開催した。復興には程遠い額だが写真の売り上げも寄付できた。会社は今、被害の少なかった一部区間を復旧、運転を再開している。だがハイライトの鉄橋付近はまだ先が見えない。ここから先は皆さんに関心を寄せていただく他はない。南阿蘇鉄道の復活は鉄道会社の復活ではなく阿蘇観光の復活なのだから。

**田島寿昭(51)**
**九州アフラ株式会社 代表取締役 熊本県**

熊本地震から1年を迎えようとしています。熊本城を見る度、あの惨劇が脳裏に浮かびます。怒号と共に突き上げてくる大きな揺れ。それも2夜連続の大地震。道路は大きく蛇行し、崩壊した家の瓦礫の撤去作業がいまだに続いています。

「何か熊本を元気付けることができないだろうか?」と思っていた矢先、南阿蘇鉄道「マンガよせがきトレイン」のお話をいただきました。この様な素晴らしい企画に携われたことを大変光栄に思っています。同じ熊本の企業として少しでも南阿蘇を、そして熊本全体に元気を与えられたら凄く嬉しいです。どうか皆さま、熊本へ阿蘇へ遊びに来てください。元気で復興へ歩んでいる姿を見に来てください。

**高橋正樹**
**女川水産加工研究会 会長 株式会社高政 取締役社長室長 宮城県女川町**

女川町には我々の感覚として復興は「予定通り」「スケジュールが進んでいる」という感じです。一方、僕らの町は復興のペースが比較的早いと言われ、多くの方面からその理由を聞かれることが多いです。

女川町は11人に1人が亡くなり、80%以上の建物が壊滅しました。建物の壊滅は人々から職場を奪い、職を失った人たちは女川を泣く泣く離れざるを得なくなりました。建物を再建しても人が住まなければ街にはなりません。人口の減少がわが町の最大の問題であることは早い段階で把握していました。

震災から1〜2年あたりまで沿岸被災地では、「民意の集約」を優先か、「スピード」を優先か」という議論がありました。女川町は「スピード優先で民意が集約された町」です。

一日も早く企業・住居を再建して日常を取り戻し、人口の流出を防ぐことが最大の課題。復興の初期段階から女川町内の各事業は期限を明確化し、情報の集約・共有をしつつ即断即決を続けました。このことが意思決定サイクルの速さを培い、今に至るまで続いています。

**首真大次郎(72)**
**建築・都市計画家 東京都**

これまでの震災復興の経験からの提言を述べます。まず、復興のターゲットを明確にすること。時間と予算と安全を総合的に決断することです。例えば城郭の再建を、歴史的に忠実に20年の歳月と500億円を費やすのか、観光をメインとした耐震コンクリート造りですますのかの選択です。また、最重要なインフラは、できるだけシンプルな単一構成とすること。鉄道敷や幹線道路と、大型建築物を複合したコンプレックスは非常時、分かり易い表現で言えば、JR駅舎上の駅ビルなどは最も危険です。建築物の被害が交通幹線を長期間分断してしまうからです。このことは特に予想されている首都圏直下型地震での大きな要因となります。

◎加藤和良(47) 気仙沼市役所 建設部 都市計画課／宮城県(現在は東京都在住)

東日本大震災発災後の平成23年と平成27年4月から気仙沼市に派遣職員として従事しました。23年の派遣がきっかけで、個人的な旅行やボランティアへの参加で気仙沼によく来ました。被災地を見てもらい、復興状況も知ってもらいたかったので子供を連れて来たこともありました。岩岸被災地は今後ますます復興が加速し、建物の建設が進んでいきます。新たな街並みができつつあるのがとても楽しみです。派遣先での業務は復興の力になるとともに、今後起こりうる災害に対処できる力を培うことができたはずです。4月には派遣元の自治体に戻っていますが、皆さんにも被災地に足を運んで復興の様子を直接見て感じてもらいたいです。被災地もますます元気になるはずです。

柳井國光(58) 閖上復興だより編集長・閖上震災を伝える会代表・会社員 宮城県

私が住んでいた名取市閖上(ゆりあげ)地区は、復興へ向け工事が急速に進んでいます。昨年7月から災害公営住宅がようやく完成し、順次、住民が戻り始めています。新しい町には戸建の公営住宅、集合型アパートの公営住宅、自力再建住宅が混在しています。先行してまちづくりを行った自治体の話を聞くと、コミュニティーづくりが課題のようです。私たちも、今年の6月から、新しい閖上の「コミュニティーづくり」の活動を始めたいと考えています。現在ある3つの団体、「閖上復興だより」、「閖上震災を伝える会」、「名取交流センター」で手を取り合い、協働事業を行っていく予定です。まちづくりは遅れ気味ですが、震災前以上に、住民同士、強いつながりのある町を目指していきたいです。

◎鶴田夏利加(17) 高校生 宮城県

東日本大震災から6年が経過しました。当時5年生の私は自宅で被災し、町の文化会館、七ヶ浜国際村」に避難しました。当時は辛いこともたくさんありましたが、たくさんの人に支えられ、人の温かさを感じました。私は現在、七ヶ浜国際村ミュージカルグループNaNa5931に所属しています。私が町の復興

そして地域のためにできること。それはミュージカル公演を通じて、感謝の気持ちを伝え続けること、笑顔や元気を届けることだと思います。

NaNa5931の曲の歌詞に、こんなフレーズがあります。

「ひとがまちをつくり
まちがひとをつくる
わたしたちのこのまち
このまちはわたしたち
かけがえのない どこにも
ないわたしたちのこのまち
We Love しちがはま」

微力ではありますが、町の心の復興の原動力になっていきたいと思います。

三浦七海(17) 高校生 宮城県

私は、震災の出来事を後世に伝えていく高校生語り部「ユリアゲ StoryGuide」をしています。中3の時「被災地の案内をお願いしたい」と言われたことがキッカケで始めました。依頼者の要望にあわせて内容を組み換えて話したり、震災支援に対する感謝を綴ったフリーペーパーを来訪者に渡す企画も考えています。語り部は、震災の経験を伝えると共に、聞き手側に想像力と災害時に生きる術を伝えることができます。そこから今後の災害での防災や減災に繋がっていくのではと考えています。

岡田晶人(53) 高校教員 静岡県

私の勤務する静岡県立浜松湖東高等学校では、予想される東南海大地震への備えから被災地を訪問するスタディツアーを2012年から行っています。行く先は宮城県と福島県です。閖上では、高校生は語り部さんと現地を歩きます。郡山では仮設住宅で被災者の方と交流します。当事者のお話を直に聞く体験は、高校生に防災意識をはぐくみます。事後の感想では、辛い体験をお話しくださった語り部の方への感謝と、家族とともに過ごせる幸せをしみじみかみしめるという内容に満ちあふれています。

太田幸男(52) 一般社団法人名取復興支援協会代表理事・防災士・宮城県防災指導員 宮城県

大震災、津波に対して無知でした。災害に対して他人事でした。まさか、自分が大災害に遭遇するなんて思ってもいませんでした。東日本大震災は余りにも被害が大きく、絶望の渦の中にいました。でも、どんな過酷な状況だろうが、生きていればなんとかなります。地獄を見ようが、血を流そうが、生きることを絶対に諦めない。生きる希望を決して失わない。諦めなかったから今があります。生きていればなんとかなるものです。全国、世界中の皆様から多くの支援をいただき、生きていく希望を得ました。

現在は、2016年に防災士を取得し、宮城県防災指導員として、仕事の合間にコミュニティーの再生への取り組みと、語り部活動を行っています。

荒川洋平(35) 名取市議会議員 宮城県

東日本大震災で故郷の閖上は津波にのまれ、そして母と弟は亡くなりました。人生観を変えられ、市議会議員として第二の人生を歩んでいるところです。七回忌を終えたこの時期にようやく閖上にお墓が建てられ、納骨することができました。

住宅の復興はまだまだこれからで、いまだに多くの方が仮設住宅で生活をしています。どこの地方も抱えている問題ですが、被災地は震災を機に急速に人口減少・高齢化が問題になっており、交流人口の増加がこれからのポイントになります。是非足を運んでいただき、何が起きて、どんな復興をしているかご覧になってもらいたいと思います。

内海健二(28) 宮城県

震災から早6年ほど経ちます。私は当時大学生で、東京に住んでおりましたので、被災した祖母の体験談です。地震による津波で祖母の家は全壊してしまいました。祖母も地震が発生したときは家にいたそうで、当時90歳で一人で避難することはできずにおりましたが、しかし、近所のお茶のみ仲間が迎えに来て間一髪で逃げたと話を聞いております。それから2年が過ぎて祖母は他界してしまいました。震災で財産をすべてなくしてしまった祖母の葬儀には驚くほどの数の方に参列していただけました。目に見える財産は震災で全て失ってしまいましたが、祖母の人生で関わってきた人たちとのつながりは震災後でも続いていたのだとその時に感じました。祖母の人生は「金持ち」ではありませんでしたが、「人持ち」な人生を歩んでいたと思います。これからの人生、何が起こるかはまったくわかりませんが、どんなことがあっても崩れることのない人との関わりを築いていけるように歩んでいきたいと感じています。

◎とよしま亮介(41) すぎとSOHOクラブ、NPO埼玉ネット、杉戸町・富岡町・川内村地域間共助推進協議会他 埼玉県

私たちの中にある東日本大震災の経験と教訓。それをきたる大規模災害に活かすため、NPO、福島県富岡町・川内村、埼玉県杉戸町で震災翌年から協議会を設立し「協働型災害訓練 in 杉戸」を開催しています。

協議会メンバーの川内村は平成24年の帰還以来、復興フロントランナーとして努力を続けています。富岡町は今年4月に指定避難解除をし、平成30年の帰還に向けて動き出しています。私たちは年に一度でも顔を合わせ、時間と想いを共有し「普段づきあい」のできる「顔見知り」になることが大切だと思っています。災害が起きた時にテレビや新聞を見て、「ああ、大変そうだな」と何処か他人事として捉えるのではなく、「大変だ！ あの人どうしただろう？」と自分にとって身近なこととして捉えることこそが、何にも代えがたい力を発揮し、手を差し伸べる力になるのだと思います。そしてそれは必ず復興につながるのだと信じています。

BOUSAI

小畑祥子 子育て防災プロジェクト 代表 大阪府

震災当時仙台に住んでいて、津波被災地の被害を目の当たりにしてから復興支援活動をしています。翌年

# 「子供たちにプライドを持ってもらえる環境は、いまだに整っていません」

に転勤で大阪に移ってからも、チャリティーイベントの開催や大阪から宮城への被災地訪問コーディネート、津波で流された写真の展示、子連れで被災した経験を語る防災講座の講師として復興支援に携わっています。

東北から離れた地では被災地の現状が伝わりにくく「もう復興しただろう」という声も多く聞かれますが、実際はまだまだ復興の道半ば。震災直後とは違う形での支援が必要とされています。これからも復興の現状や被災体験を伝え、大阪と被災地をつなぐ活動を続けることが、私のライフワークだと思っています。

**◎菅原康雄([illegible])**
**菅原動物病院 院長／宮城県**

私の住む福住町町内会は、東日本大震災が起きる8年前に巨大地震を想定した防災訓練を始め、徹底した「減災」を柱に約千名の住民名簿を2か月で作成しました。できるだけ行政に頼らない自主管理マニュアルは、あの大地震に立派に機能し、動揺することなく住民を守り切りました。既に締結していた災害時協力協定で食糧、生活物資は発災直後から順次届けられ、9割程は津波の被災者に届けました。他助と称したこの活動は行政の手の届かない人々を勇気付け、更にメンタルヘルスケアに発展。現在は被災した子供たちで結成した「みちのく仙台ORI☆姫隊」と一緒に動物ふれあい活動のため、剥製ジャイアントパンダを連れ、被災地を巡っています。

**◎カズボンママ([illegible])**
**自治体事務職／岩手県**

6年前の3・11の当日、職場にいた私はすぐ30km離れた二人のおばあちゃんと夫、3歳の子がいる自宅に電話をかけました。「もしもし」と二瞬つながったけれどすぐに切れ、小学校にいるはずの上の二人の子供の安否も分からない。建物1階が浸水した職場で情報から遮断され、不安な一晩を過ごしたことが忘れられません。

結局、自宅は被害を免れ、小学校は津波の来ない場所まで移転したけれど、それが「復興」だとは思いません。我が家では、子供とも話し合って避難ルートを決めています（例えば海に近い中学校からの帰り道なら、山側の道から、とか）。また暖房器具も反射式か薪ストーブにしていざとなれば煮炊きにも。災害に備える心持ちが大切だと思っています。

**◎ささきまさる([illegible])**
**消防団員／岩手県**

東日本大震災では防潮堤を越えてきた津波に襲われ、消防団の仲間が犠牲になりました。6年が経ち、大きな防潮堤は完成しましたが、それでどこまで防げるのか。人の力は限界があるのではないかという不安は今もあります。子供たちは今でもサイレンの音には敏感です。

思い知った自然への恐れを忘れずに、それぞれが過信せずに訓練や避難への備えを欠かさないこと。それが「復興への近道」だと思っています。僕は今も、マイカーには常に消防半纏と長靴、ライトを載せていますよ。

**◎ゆい([illegible])**
**事務職／岩手県**

東日本大震災後、高台に再建された住宅で新しい暮らしを始めた方がいる一方で、少数ながらも被害にあった土地で住み続けている住民もいらっしゃいます。

住民が移転されたことで街から賑わいが失われると、残った方の孤独感も強まってしまいます。交流のためのサロンが開かれることもあるけれど、そうした集まりには顔を出さない人もいます。互いの交流を保っていく工夫が、次のステップとして必要なのかなと思います。

**◎荻原 直**
**宮城県南三陸町役場 産業振興課／宮城県**

東日本大震災の復興支援のため、平成28年4月から宮城県南三陸町役場に派遣され、産業振興課という部署で観光振興を担当しています。出身の山形県庄内町は南三陸町の友好町です。

震災から6年が経ち、生活の再建や新しいまちづくりなど復興が進む南三陸町。観光面では、三陸自動車道の延伸や新しい商店街のオープンなど明るい話題も多い一方、震災前に比べて人口が約3割も減少しているという厳しい現実もあります。以前の町の活気を取り戻し維持していくには、交流人口の増加が至上命題。イベントや物産展の開催、観光プロモーション、旬な観光情報の発信などを通して、国内はもちろん海外からの誘客にも力をいれています。

復興に向けて観光が果たす役割はとても大きいと感じています。南三陸町が震災前よりもさらに魅力的な町として再生し、町の皆さんが元気になるよう、観光の持つ力を信じて、日々の業務に取り組んでいます。

**◎Roger Smith([illegible])**
**松島町産業観光課 国際交流員／宮城県（アメリカ コネチカット州出身）**

元々日本に興味があり、名古屋の大学に留学をしていました。その頃から、いつか日本に戻ってきたいと思っていました。そんな時、東日本大震災という悲しいニュースを見ました。実際にこの目で確かめるため、2012年に一度被災地を訪れました。

その後、被災地の復興支援に関わりたいと強く願い、2014年8月から国際交流員として松島町産業観光課に所属しています。私が来た頃、東北の人は、外国人に慣れていないようでした。そこで、スタッフさんと英会話トレーニングをしたり、英語表記メニューの作成等お手伝いをしたりしました。そうすることで、地元の人の温かい心を伝えることができるようになりました。東北の知られていない場所をもっと皆に知ってもらえたら嬉しいです。

**◎安藤正樹([illegible])**
**荒海団 漁師／岩手県野田村**

野田村は岩手県沿岸北部に位置する人口4000人の小さな村で、プランクトン豊富な外海で養殖する「荒海ホタテ」が有名です。

忘れもしない2011年3月11日。東日本大震災大津波により、私たち漁師は一瞬で仕事を失い先行きが真っ暗になりました。途方に暮れていたその時、奇跡的に沖に浮かぶ一隻の船をみつけ、普段は一匹狼の漁師たちが結束し共同で荒海ホタテを育て始めました。今では船や施設も復旧し、全国各地から多くのご支援をいただいたおかげで生産量も震災前に近づいております。

日々仕事ができることに感謝しつつ、大切に育てた荒海ホタテを皆さんにお届けするのが恩返しだと思って頑張っております！ 今後とも我々荒海団を宜しくお願いします。

**◎高田 彩([illegible])**
**ビルド・フルーガス代表／宮城県**

東日本大震災で運営するギャラリーも津波で浸水。自分が立ち上がるためにも震災直後から物資支援、避難所、仮設住宅などで復興状況に合わせた支援活動をアーティストたちと共に行ってきました。「生きる」活力に直結する活動、暮らしを整える活動、コミュニティーへの帰属・再構築を図る活動、アイデンティティーや存在意義を発掘する活動…。被災地の状況は繊細に変化します。その変化を大切にしながら、共に復興への道を歩んでいきたいです。

**◎佐藤一男(51)**
**陸前高田市米崎小学校仮設住宅 自治会長／岩手県**

東日本大震災発生から6年が経ちました。色々な形で多くの皆様に支えられた時間です。この場をお借りして御礼申し上げます。

6年前、陸前高田市では市役所、中央公民館、体育館、病院など避難施設となる建物も津波にのまれたため多くの犠牲者を出してしまいました。市役所や病院などの公共施設の半数は今も仮設施設で対応を続けています。消防施設やコミュニティーホールは本設し運営していますが、体育館などは今もできていません。津波がすべてを奪い市街地のすべてを失いました。住民の住宅再建

を優先したため、商店街もいまだに仮設商店街が市内に分散している状態です。

しかし、最大の問題は建物ではないと感じています。震災からの6年間に多くの高校生が陸前高田を離れました(陸前高田市には大学も専門学校も高収入が見込める就職先もありません)。中学高校と、被災地と呼ばれガレキが重なる町で暮らし卒業した若者は、陸前高田に戻ることはあるのでしょうか。

自分たちも一度は陸前高田を離れました。陸前高田を離れてみて初めて、海のありがたさ、山のありがたさ、高田松原のありがたさ、親戚からもらうリンゴや牡蠣やホタテのありがたさを感じました。それまで「あってあたり前」だったのです。

離れて初めて、何も無いと思っていた陸前高田にも自慢できるものがあることを知ります。他の地域には無いということを知った時に「故郷がプライドになる」んです。陸前高田を震災後に離れていった若者は、そのプライドを持てずに旅立っていきました。はたして、数年後に彼らは戻ってくれるのでしょうか。この問題を解決するのに必要なのは時間だけでしょうか。本当の復興には若い力が必要です。残ったものだけで、なんとかするなんて先が見えています。子供たちにプライドを持ってもらえる環境は、いまだに整っていません。それが、今の陸前高田です。

◎佐藤 慧(34)
フォトジャーナリスト/東京都

あれから6年。一瞬のようにも、遥かに長い時を経たようにも感じる数年だった。陸前高田市で実家が被災、母は津波に呑まれ、父はその数年後、後を追うように衰弱し亡くなった。沿岸被災地では、嵩上げ、防潮堤、市街地の移転など、大掛かりな工事が続き、真新しい道路や建物に、当時の傷跡は埋もれつつある。「復興」とは何か。ずっと考え続けてきたことだ。「復旧」ではない。失われたものの中には、取り返すことのできないものが無数にある。その空白に意味を見いだしながら明日を目指すこと、それが「復興」への道のりではないだろうか。目に映らない多くの傷が、まだ長い時間を要している。その痛みを優しく包み込めるような社会であればと願う。

◎渋谷敦志(41)
写真家/東京都

「今はまだ復旧。復興は被災した人や家族を亡くした人たちの心が癒やされ、前に向く気持ちになった時」

震災直後から撮り続ける南相馬の上野敬幸さんが最近言った言葉です。家族4人を津波で亡くし、今も行方不明の父と長男を探す上野さんにとって、あの日の爪痕が海辺の風景からどれだけ薄まっても、癒えない心があるのです。それを伝えようとするぼくは自分に言い聞かせます。わかり急ごうとするなと。わかりえない。でも、それでいい。わかるとはわけること。わからないということはわけないということ。わかち難い感情を、わけずに、わかろうと思い続ける心持ちを大事にしたいと思っています。

◎木村紀夫(51)
深山の雪オーナー/長野県

昨年12月9日、津波に流されて行方不明だった二女の汐凪(ゆうな)の遺骨の一部が5年9か月ぶりに発見されました。

発見された場所が、福一原発から南へ約3キロの自宅からすぐの所だったことで、すぐに見つけてやれなかった悔しさと、生きていたかもしれない、見殺しにしたかもしれないという気持ちが残ってしまいました。その原因を作ったのが原発事故であり、満足に捜索しないまま瓦礫を集めてしまった国でもあると思います。

今みなさんが許容している世の中の流れに声を上げて反対するつもりはありませんが、少なくとも自分はもうそこに属して生きていくことはしません。生き方を変えるくらい、東日本大震災は自分にとって大きなものなのです。

◎桜井勝延(61)
福島県南相馬市長/福島県

私が市長を務める福島県南相馬市は、東日本大震災による「地震」・「津波」・「原発事故」と三重の災禍に見舞われました。特に原発事故は、一時市民のほとんどが市外への避難を余儀なくされるなど、これまでに類を見ない災害となりました。

あれから6年、被災したことをいつまでも嘆いてはいられません。風評や天候に左右されない大規模植物工場、原発に依存しないためのメガソーラー発電、そして、ロボットのまちを目指すための口ボット実験フィールドなど新たな取り組みを行っております。これらは、震災がなければ叶わなかった、震災を受け、国や県、全国の皆様の支援があったからこそできた事業です。

「ピンチをチャンスに」の想いで復興に取り組んでいます。

◎小松理虔(37)
いわき海洋調べ隊「うみラボ」発起人/福島県

2013年の秋から、毎月一度、福島第一原発沖の海の魚を釣って、放射線を調べてきました。そこで知ったことは「福島の魚が汚染されている」ことではなく、汚染と呼べる状況ではないほど線量が下がってきていること。そして、漁業資源が大幅に回復し、全国に冠たる「豊かな海」になっているということでした。それらは「データ」からも読み取ることができます。

漁業を見る限り、福島は「お払い箱」どころではありません。多くの知見と資源に恵まれた「宝箱」です。日本の漁業を「持続可能」なものにしていくための大きなヒントが、福島の海で見つかりそうです。

◎浜田真理子
ミュージシャン/島根県

地元、松江の原発のことを2011年の福島第一原発事故で初めて意識することになった。一度、事故が起これはこんなに大ごとになってしまうのかと恐ろしくなった。一体何が起こったのか、これからどうすればいいのかなど、もっと知りたくなって2013年にスクールMARIKOという勉強会を松江で始めた。これまで、福島を中心としたのべ25人のゲスト講師の方にお話を聞いた。そういう応援の仕方があってもいいと思う。復興の形にしても一つではない。多分そこに暮らす(あるいは暮らさない)人の数だけある。正確な情報を知り、更新していくとともに、データからはみ出したところにある人々の心の動きも見つめたいと思っている。

◎紺野 宏(57)
NPO法人 福島農業復興ネットワーク進営牧場「ミネロファーム」場長/福島県

ミネロファームは、東日本大震災発生並びに東京電力福島原子力発電所事故により、離農・廃業せざるを得なかった酪農家の救済・福島県酪農生産基盤の底上げなどを目的として設立されました。県内としては比較的規模の大きい牧場です。生乳出荷を始めてから5年が経過し、少しでも底上げに貢献できているつもりでした。しかし、私たちの踏ん張りよりも県内の酪農家戸数の減少は、留まるところを知らないようです。

その一方で、当牧場から巣立った2名を含む5名の酪農家たちが、580頭規模の牧場を立ち上げてくれました。うれしい限りです。

福島県酪農のために、彼らと共に「もう、ひと踏ん張り」できればと思っています。

◎ぺんぎんナッツ 中村陽介(34)
吉本興業所属 芸人/福島県

昨年8月、間 寛平師匠が、東北を元気づけたいと始めた「KANPEIみちのくマラソン」で走りました。自分は吉本の「住みます芸人」として福島に住んでいます。今は仮設住宅向けのコミュニティーラジオ「おだがいさまFM」でレギュラーを持ち、番組を通じて皆さんに元気になっていただきたいと日夜頑張っています。

◎黒田[illegible]子
ナレーター/東京都

糸魚川生まれです。姉から「この店も、あの店もあそこもここも全てが燃えている」と聞き、小さな頃に遊んだ街並み、商店街、同級生の家々、思い出が多すぎて…涙が溢れました。すぐに現地で復旧活動に携われない歯痒さでいっぱいでしたが、できることはなんでもやりたい!と募金活動に参加。新日本フィルのコンサートや東京新潟県人会のイベントで募金活動を行いました。中越や東北、熊本の方々から「皆さんに助けていただいた。今回は私たちが募金します。恩がえしをする番です。がんばってね!」と支援のリレーができていることに感謝の気持ちと温かい言葉に目頭が熱くなりました。東京から故郷復興を支援します。「がんばれ糸魚川!負けるな糸魚川!」

◎五十川 晶(74)
建築士・技術士／千葉県

浦安も東日本大震災で被災。私はコミュニティーの防災部長をやっていたので、水、電気、ガス、排水、地面の現状回復や、避難所をつくり運営組織も立ち上げました。避難所のルールやマニュアルも作成。その取り組みは今にも引き継がれ、自治会の訓練にも用いられています。復興に関しては、地元住民と「ＮＥＸＴ30」という復興計画を策定。新浦安は三方が水で囲まれた埋め立て地で、波に洗われたり、液状化などして土地が無くなりかねない。そこで、海に面した護岸を砂浜にし、桟橋をつくることも提案。そこをレジャー施設にするとともに、防災物資を船で運搬できる拠点にする。そんな提案を、次の30年に向けて実現させたい。

◎安田菜津紀(30)
フォトジャーナリスト／東京都

家族の縁で通うようになった、岩手県陸前高田市。学生時代からお邪魔してきた、故郷。共に復興の道をたどる街をファインダー越しに見つめ、"復興"の形とは何かを考えてきました。全ての山を切り崩すことも、あらゆる海を塗り固めることもできないからこそ、人間の側が自然の力を認め、いかに次世代の命を守るために知恵を持ち寄り合えるのか。災害が起きる度に、私たちに課せられる大きな宿題でした。病院や役場を必ず津波被害のない高台に作ること、日頃から共に生きる人同士のつながりを絶やさないこと。生きた教訓を手渡せるよう、人の力が今、問われているのではないでしょうか。

◎宇田川敬介(47)
作家／東京都

阪神淡路大震災の時は、被災者でした。住んでいた家が被災して立ち入り禁止になり、住みかを失い、水も電気もガスもない日が続きました。自分では復興には携われなかった。なので東日本大震災では、物資の寄附などに携わりました。

今、心理学の先生のお誘いがあり、東北4県のお坊さん向けの講演会をやっています。お坊さんは被災者の方々の相談役をずっと務めていますが、自分自身のケアができていない。お寺の復旧も後回しになっており、片づけができていないお墓もたくさんあり、そうしたことでストレスがたまっている。そこで、気晴らしも兼ねて講演会を行い、相談にも応じています。5年以上経ちましたが、精神的なケアはまだまだ必要です。

◎中村見自(67)
大岳院住職／鳥取県

東日本大震災のときには、曹洞宗として東北の復興活動に携わりました。お祈りをしたり、お地蔵さんの建立などをいたしました。桜の木を植樹したり、地元鳥取に戻るとすぐに、鳥取中部地震に遭いました。お墓も被害を受けています。が、街の復興で石材の需要が高まり、お墓の復旧も順次という状況。2月の大雪で作業も遅れています。今、復興の真っ最中です。

◎遊喜朗(65)／大道芸能家／東京都

阪神大震災直後から私は、神戸市立御蔵小学校へ紙芝居ボランティアで駆けつけました。その年の夏休み、児童たちが紙芝居をつくってくれました。その紙芝居を全国で上演しています。新潟の被災地では園児たちに紙芝居ボランティアを。そして東日本大震災では両親を亡くした姉弟の鎮魂紙芝居「星めぐり物語」、そして震災応援歌「星めぐりサンバ」ＣＤをリリース。自力再建集落のコミュニティー再生の為、慰問や支援金を宮城県名取市小塚原北地区へ行いました。現在は「大地震の時の心得」を含め「防災紙芝居」師として活動しています。

◎伊東正和(69)
お茶の味萬 店主／兵庫県

店のある大正筋商店街（神戸市長田区）は阪神・淡路大震災後の火災で98店舗の9割が焼けてしまった。あれから22年、長らく仮店舗だったから、"もう神様に見捨てられたんかな"と何度も諦めかけたけれど、復興できた。その経験の"語り部"をしています。今、実に多くの出会いがある。

南三陸町（旧志津川町）の商店主さんたちも仲間。震災後3〜4か月にいっぺん東北に足を運ぶようにしているのは、そんな周期で落ち込んだ被災者として の経験から。「どん底では"先輩"の僕らが応援してんねんで」と寄り添うようにしています。10年後の笑顔につながるはずだって。

商店街に話を聞きに来た高校生には話すんです。「今あるものは、"あたり前"ちゃうねんで」てね。

# 「今あるものは、"あたり前"ちゃうねんで」

◎宮武裕美(54)
特定非営利法人 兵庫県子ども文化振興協会 専務理事／兵庫県

2012年から毎年、高校生たちと一緒に宮城県にボランティアに出かけています。その中で、仙台や石巻と兵庫の高校生が交流し、同世代ならではの悩みや辛い思いを話したり聞いたりする場を作っています。交流を通して高校生は自分たちが現地で見たり、聞いたりしたことをみんなに伝えていくことが大切だと感じたようです。

©Takashi Iijima

◎佐渡 裕(55)
指揮者／兵庫県

私が芸術監督を務める兵庫県立芸術文化センター（西宮市）は95年の阪神・淡路大震災からの心の復興のシンボルとして、震災10年目にオープンしました。今では年間50万人を超えるお客様が、オペラ、コンサート、落語など様々な舞台を楽しんでくださっています。

家族や家を失った悲しみは簡単に消えませんが、「震災を通して一人で生きているのではないと改めて感じた」という話を多く聞きました。私は「誰かと一緒に歌を歌いたい！ハーモニーを奏でたい」という気持ちが音楽をする一番の理由、原点ではないかと思っています。東北や熊本の被災地で音楽にできることが必ずあると信じ、できる限りこれからも足を運びたいと思っています。

◎戸田龍馬(81)
元伊丹市議会議長／兵庫県

阪神・淡路大震災に遭遇したのは市会議長の時でした。突き上げられるような感じで飛び起きたのです。現場を回ると、水を持ってこいの要求が一番。電話をつけろ、暖炉を入れろ、寒さに震える市民の怒声が飛び交っていた。何から手をつけたらいいのか、初めての経験でした。

自衛隊が給水車を出動してくれた。でも、ほうぼうから「こっちも」と電話が鳴って「はいはい」と言うしかできない。少々の予防措置がとられていても焼け石に水だったでしょう。水の配給が回転すると市民も少しは落ち着いたようでした。

市は瑞ヶ池貯水池を補強して水源を確保しました。猪名川の原水を守るため、今も市民やボーイスカウトがボランティアで清掃に精を出しています。

◎能島裕介(41)
特定非営利法人ブレーンヒューマニティー 理事長／兵庫県

関西学院大の学生だった95年、阪神・淡路大震災で被災した子供たちを対象にした家庭教師の派遣など学習支援活動を始めました。その後、学生主体でＮＰＯを立ち上げ、阪神以外の被災地でも子供たちの支援を行ってきました。

遊ぶ場所がない被災者の子供たちのためにキャンプなどの屋外レクリエーションの場を用意するのももう一つの柱です。家庭教師やキャンプを通して、子供の不安や悩みに耳を傾けるサポートにつなげることができる。

東日本大震災や熊本地震の被災地では今、塾や習い事、体験活動で使えるクーポン券の提供を行っています。子供を支えることはその地域の未来をつくることだと思っています。

◎若林ちえこ
ＦＭえどがわパーソナリティー／東京都

東日本大震災発生1週間後、友人二人とトラックを運転し、お弁当などの支援物資を届けました。被災された方や受け入れ先に「今、何が必要か」をインタビューし、私の番組で現地の声を伝えました。昨年からはボランティア団体に加入し、遺品捜索など引き続き支援を行っている中で熊本地震が発生。仲間と共に飛行機に乗り込み、積み込み上限50ｋｇの荷物として子供用アレルギー対応食品を持っていきました。現地では、支援物資の仕分けも行いました。現地の声を伝え一緒に考えてもらうのも支援の一つと考えています。

域でも災害が起きると思って備えをしましょう。

◎石川香織(33)
ネットキャスター／東京都

東日本大震災のとき私は、FM佐賀の県庁担当記者でした。県民の方から役所にどんどん支援物資が届き、山のようになっていました。そのレポートをし、佐賀の方の被災者に対する思いを感じました。そうした経験も踏まえ、政治の力が大事だと痛感し今、小池政治塾で政治の勉強をしています。

◎白須一也(53)
東京都隊友会医療支援部会代表・NPO法人JPSSO理事／東京都

阪神・淡路大震災、東日本大震災では、ボランティアグループの一員として医療活動に参加しました。常総水害、熊本地震においては、自らが代表を務めるボランティアグループと共に医療ボランティア活動を実施致しました。現在も原発事故後の除染作業員に対する医療支援活動や、東北震災復興の象徴とされる「相馬野馬追い祭り」の救護ボランティア活動を有志と共に毎年実施しています。

◎戸塚絵梨子(30)
パソナ東北創生 代表取締役／岩手県

東日本大震災後、ボランティアで岩手県釜石市を訪れてからというもの、東北の人や自然、食べ物に魅了され、2015年に会社を設立。「地域に眠る資源」と「ソトモノの強み」をマッチングすることで、釜石での新たな事業・価値創造に向けた取り組みを行っています。現在では岩手県釜石市で起業を通じた地域おこしを行う移住・起業支援プログラム「釜石ローカルベンチャーコミュニティ」の事務局としてプログラム運営を行っています。

地域には多くの眠れる資源があり、なりわいや仕事を生み出せる可能性が大いにあると感じています。復興から創生への取り組みは、正解はないかもしれませんが、今やっていることは未来につながると信じて取り組んでいます。

◎渡辺日出夫(42)
認定NPO法人ADRA Japan 国内事業担当マネージャー／東京都

私は、防災啓発と災害被災者支援を仕事として行っていますが、東日本大震災以降の自然災害の多さには心が痛みます。東日本大震災も今ではかなり風化しているし、特に水害被害はメディアの取り上げ期間が短いせいか風化するのも早いです。熊本地震の被災地はまだ復旧すらしていないところもありますし、東日本大震災の被災地ではまだ仮設住宅暮らしが続いています。全国どこにいても被災地の支援ができます。それは過去の被災地産の商品を買うことや被災地に観光に行くことです。完璧に復旧・復興していないかもしれないですが、そこに行けば美味しいものや素敵な人たちに出会うこともできます。また対岸の火事のように被災地を見るのではなく、災害大国日本に住んでいる以上は自分の地域でも災害が起きると思って備えをしましょう。

◎野上浩(65)
日本近代五種協会専務理事／東京都

近代五種の選手の多くは自衛官です。そんなこともあり、復興に取り組む自衛官への支援を行いました。震災直後から自衛官は、自らの時間、労力、食糧をすべて被災者に提供してきた。その自らの家族も被災者なのにも関わらずです。その自衛官のために、東北の駐屯地を回り、ピザなどの食事をふるまいました。また、隊員とご家族の写真をポートレートにして差し上げるなどしました。自衛隊なくして被災地の復興はありえません。

◎湯澤魁(21)
明治大学4年／東京都

神戸にいた高校1年の時から宮城・福島に足を運ぶようになり、大学4年になる現在も月に2、3度、主に福島県浜通りに通っています。所謂ボランティアのようなお手伝いをすることも多いですが、地元の方にお世話になりまくりで、「支援している」なんて口が裂けても言えません。町の雰囲気が大好きで、そこにいる地域の方々に会いたくて、私が行きたくて通っています。

地元の方にお褒めいただいたり、お叱りいただいたり、見守ってくださったり。よそ者ではありますが、私は東北で成長しました。その恩返しをするためにも、私はこれからも伺い続け、地元の方に寄り添って少しでも役立てるよう尽力する所存です。

# 「それぞれの祈りの落ち合うところに、“復興”と呼ぶに相応しい何かが待っているのだと夢想しています」

◎滝原隆浩(46)
I love Saitamaぷろでゅーす代表／埼玉県

震災や復興支援を通じ私が学んだことは、この社会は意外と“危うい”という現実です。現在の日本は飢餓、疫病、戦争と無縁になりました。安全と便利、自由を得たけれど、実はエネルギーや資源を浪費する犠牲によって成り立っている現実を見ないようにして私たちは暮らしています。

仕事帰りに大宮に着くと駅前は多くの人で賑わっています。でも、私にはなぜか“廃墟の街”に見える瞬間があるんです。私たちは得たものと引き換えに地域や人との関係を失っていないか……。災害は多くの悲しみを生み出しますが、私たちへの警鐘と心のつながりを築く機会となっています。あの日を思い起こし次に一歩を踏み出すため、この春、カメラを鞄に入れ東北へ行ってみようと思います。

◎中村月音(11)
小学5年生／東京都

東日本大震災の時に、私が乗らなくなったベビーカーを仙台の人に送ったという話を母から聞いた6歳の頃から、募金をするようになりました。日本だけでなく、外国で災害が起きた時にもコンビニやスーパーにある募金箱におつりなどを入れています。去年の熊本地震の時にはお年玉袋から1000円札を2枚出して募金しました。災害の時の避難所の様子を見ると胸が苦しくなって、何かしなきゃ、といつも思います。

◎村山嘉昭(48)
写真家／東京都

東日本大震災の発生直後から現在に至るまで東北の太平洋沿岸に通い続けていますが、物事を単純化して伝えるニュースを見かけるたびに、メディアの末席にいる者として歯がゆくやるせない気分になります。震災や原発事故から6年が経ちましたが、「復興」の状況や捉え方は様々。影響が長期化するほど、より丁寧に、時として一人称で物事を見ていく必要を実感しています。私小説ならぬ私報道。関心があれば実際に現地を訪れ、メディアが報じない“日常”を見て感じてください。そして旅先で知り合った人やお店があれば、継続してお付き合いすることをおすすめします。「百聞は一見にしかず」ということわざは、実に的を射た言葉だと思います。

◎後藤正文(40)
ミュージシャン

誰かの悲しみを隅々まで理解することは、とても難しいことです。それが癒えるまで、隣に佇むことはとてもできずに、いつだって自分の無力さを思い知らされます。きっと僕らは、それぞれ、それぞれに形の違う悲しみを丸っと背負って生きてゆくしかない。

けれども、僕たち人間には想像力があります。分かり合えなくても、思い合うことはできます。

少しずつ手分けをして、手を貸し合って、強く抱きしめ合うように、町や社会が豊かであることを僕は祈ります。そして、その祈りの先に、それぞれの祈りの落ち合うところに、「復興」と呼ぶに相応しい何かが待っているのだと夢想しています。

コメントをお寄せいただいた皆様、お読みいただいた皆様、そして復興特集にご尽力いただいた皆様。本当にありがとうございます。今回の特集が皆様のお力に少しでもなれることを、そして明日につながることを、願っております。

――ビッグコミックスピリッツ編集部

●取材・構成／北村和彦・田地野 圭・長澤智子・広野真帆・品 仁 ●デザイン／田中雅介+ベイブリッジ・スタジオ

FUKKO